

近世の京都円山時宗寺院における空間構成に関する研究

Landscape Formation Appeared on Maruyama Jishu Temples, Kyoto in Edo Era

出村嘉史*・川崎雅史**・田中尚人***

Yoshifumi DEMURA*・Masashi KAWASAKI**・Naoto TANAKA***

1 研究の目的と対象

1) 背景と目的

京都には長い歴史の中で環境と密に結びついた公共的空間が多く存在する。中でも円山界限は、現在庭園を配し、料理屋を並べ、花見席をはじめ四季折々の愉しみを有する、市民の生活に根付いた公園(円山公園)となっている。その領域は近世より、安養寺、長楽寺、双林寺、祇園社(八坂神社の前身)の境内を含み、東山の広い山辺を形成し、かつ都市の中心部とも結節することから、地形や自然、都市的位置などの好環境を利用した、全国でも固有な公共空間としての特異性を持つ。本研究で対象とする時宗寺院とは、上にあげた3つの寺であり、近世においてはとりわけ賑わい名所地として名高かった。

円山界限についての研究は、丸山¹⁾により近代に出来た円山公園の成立過程についてなされている。しかし、近世のここにおける公共的空間について、その具体的な空間構成と利用に注目した研究は稀少である。本研究は、公共空間における環境デザインの新たなコンセプトを探究するための研究の第一歩として、絵図や文献などの歴史的資料の分析と今日における現地調査をもとに、近世の京都円山界限に現れて新たな文化を形成した具体的な空間構成を把握することを目的としている。

2) 対象地の位置的特徴

図1は「花洛名勝図会」(元治元年、1854)による東山全景の一部である。絵図中央より上の大きな建物が知恩院であり、ここより右側(南側)が円山界限で

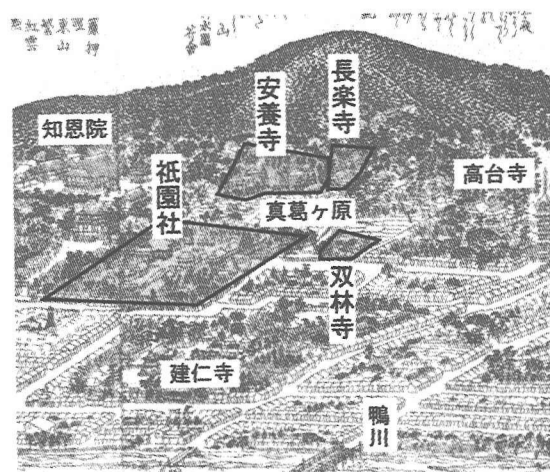


図1 近世の円山界限(花洛名勝図会をもとに作成)



図2 現在の円山界限東西の連続立断面

ある。この地域は真中の真葛ヶ原で大きく上部と下部の二つに分けられる。下部に祇園社(現在の八坂神社)があり、上部に時宗の安養寺、長楽寺、そして双林寺が見える。この円山界限周辺は北に青蓮院、知恩院、南に東大谷、高台寺、八坂の塔、正法寺、清水寺、西に建仁寺、祇園町、鴨川と、文化的要素に囲まれており、全体が東山の大きな山辺を形成している。

山辺であるが故に、本来この場所には空間的な多様性が備わっていたと考えられる。円山界限の東西高低差は約70mもあり、眺望による遠近のコントラストや、3次元的に変化するシーケンス景観など視覚を楽しませる空間構成を容易に作り出す土台があった。円山界限は図2のように地形の傾斜から山辺下部、中部、上部の3つに分けられ、この傾斜の違いが近世において多様を極めた活用法の違いに結びつくことになる。

3つの時宗の寺は、長楽寺と安養寺が急斜面を特徴とする山辺上部に、双林寺が緩やかな斜面を特徴とする山辺中部にそれぞれ位置していた。

Key Words : 景観、空間設計、公園・緑地

* 学生員 京都大学大学院工学研究科 修士課程
(〒606-8501 京都市左京区吉田本町 Tel 075-753-5123)

** 正員 博士(工) 京都大学大学院工学研究科 助教授

***正員 修士(工) 京都大学大学院工学研究科 助手

1) 全景 — 斜面に収まる塔頭群

六阿弥全体を平面図化したものが図6である。6つの塔頭は互いに隣接しており、総門から本堂へ向かう屈折した参道の左右に展開した。西から、参道の南側に正阿弥、北側に左阿弥、その東に南から庭阿弥（端之寮）、也阿弥、連阿弥、そして参道と弁天堂を挟んで春阿弥と並んでいた。六阿弥敷地だけで東西の高低差は約30m（約25%）もあり、この傾斜を活かし利用しながら庭を造り建築を納めていた。各塔頭の境界は、傾斜を解消し建築の足場を造るための石垣であったり、簡易な塀や柵のみであったりし、隣接する塔頭間に大きな視覚的断絶はない。また図7の絵図のように、庭園の豊かな自然によって山辺に並ぶ建築群のシルエット

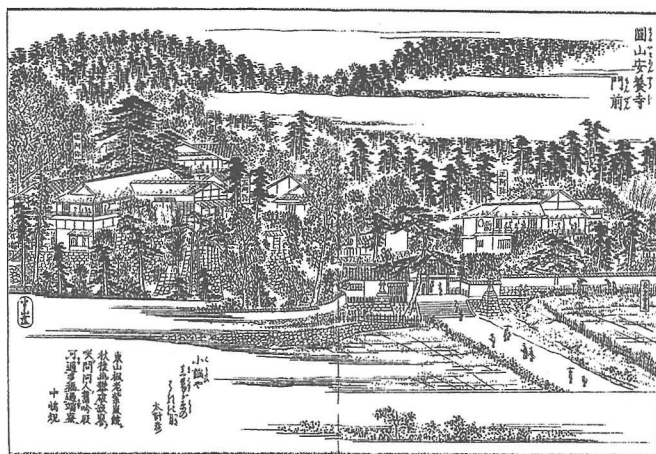


図7 安養寺門前（花洛名勝図会より）

トがぼかされ、山の風景に対する違和感を抑える工夫がされていた。

全体を眺めて気がつくことは、現在のこの地にはない水の流れが造られていることである。実際の水源は定かではないが、図6の平面図から也阿弥と正阿弥が連続した水のの流れを持っていたと考えられる事により、六阿弥全体で水のネットワークができていたと推察できる。六阿弥の中で一番高度の高い春阿弥において水が豊富に使われており、そこから配水をして他の塔頭へ廻していたのだろう。連阿弥以外の塔頭においてはこのネットワークで遣水を巧みに庭園に導入していた。

2) 各塔頭における庭園と建築の関係

各塔頭の空間構成は、その位置における地形と深く結びついており、建築の配置や造り、庭園の造りは互いに密な関係にあった。

a) 左阿弥

左阿弥は現在にその地形をほぼそのまま残して

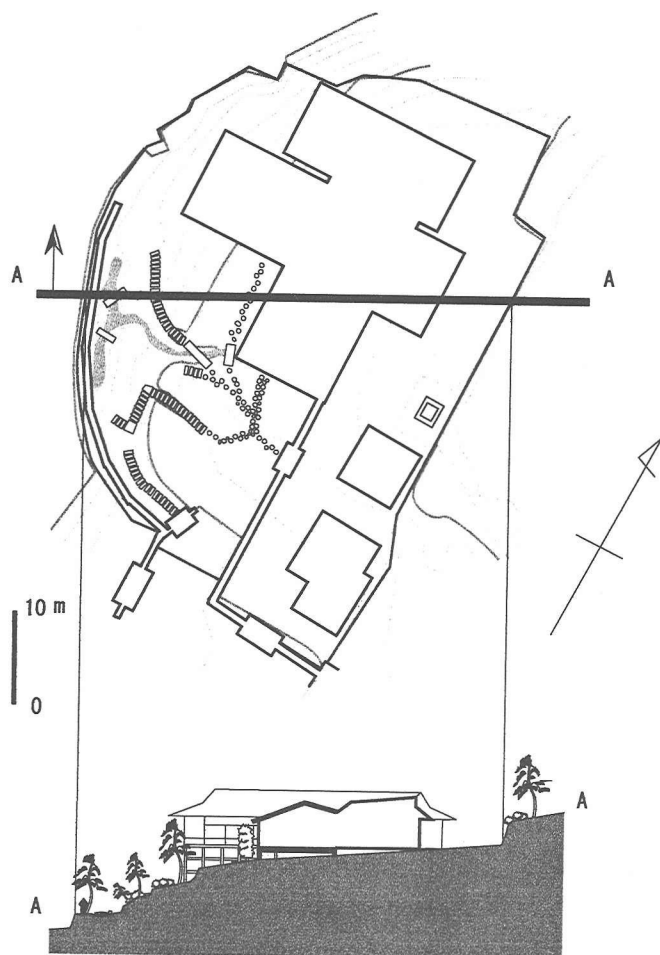


図8 左阿弥平面・断面図

おり絵図と併せて近世の空間構成を把握できる。図8は当時の空間構成を再現した平面図と断面図である。図9にみられるような、確保した平場から突き出した大きな懸崖建築によって洛中への眺望を確保し、平場によって出来た高低差のギャップを掛造り建築の下へ向かって数段の石垣を用いて一気に開放することで、庭園内の地形に大きく変化をつけ、水を流し階段を配し複数の視点場を設けることで景観を豊かにしている。



図9 左阿弥の庭園と建築（都林泉名勝図会より）

b) 正阿弥

正阿弥については現在大きく地形が変わっているが、一部残された石垣や地形改変される前の明治期の写真などにより概要を把握し、絵図の情報を加えて作図したものが図 10 である。掛造りではなく石垣上の建築で眺望を確保しているが、左阿弥とほぼ同じ方法で下へ向かう庭園を造っている。それと同時に、建築の反対側（東側）では上へ向かう庭園も造っている。庭全体と洛中を見渡す事が出来る高いポイントに足場を設けることで新たな視点場を確保し、また建築から東山を眺める方向の景観にも変化を与えている（図 11）。

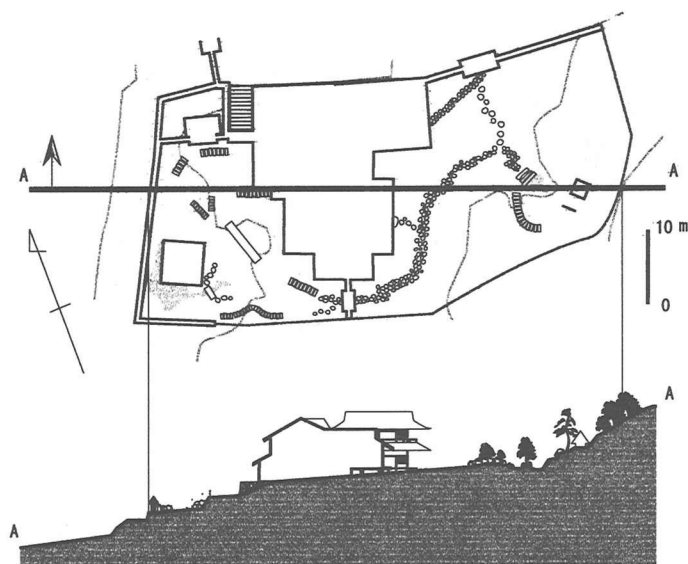


図 10 正阿弥平面・断面図

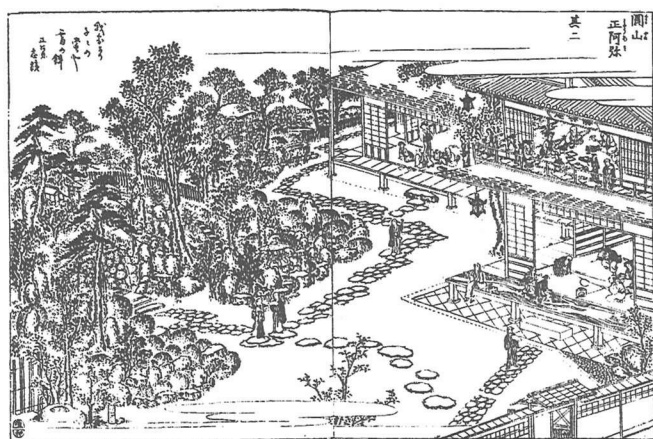


図 11 正阿弥東側（都林泉名勝図会より）

c) 端之寮

端之寮は現在その敷地のほとんどを円山公園の苑路にとられているが、絵図や明治期の写真と見比べると、地形の外形は保存されていることが分かり、それらの情報をもとに図 12 を作成した。建築を北東部に集中させ、南西に向かって広く庭園を造っているが、庭園の南部は比較的なだらかな傾斜であり、山辺上部の急

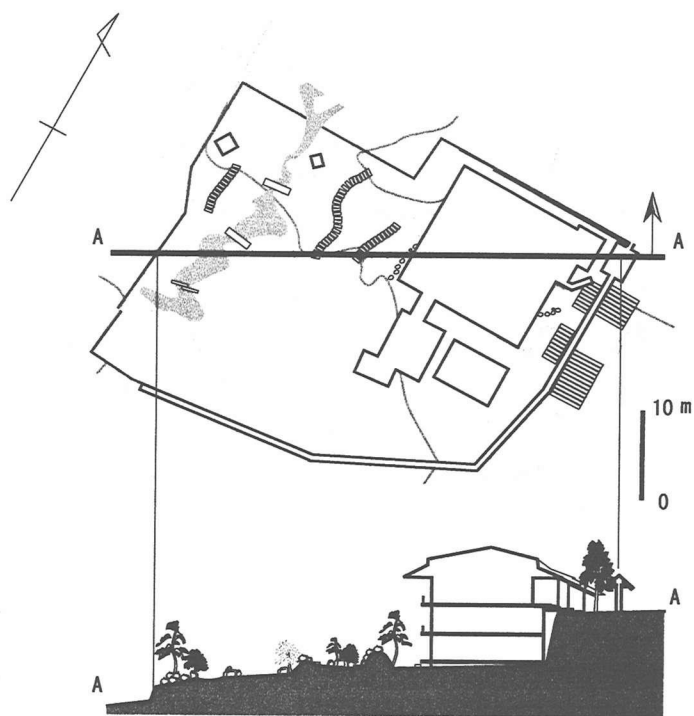


図 12 端之寮平面・断面図

斜面においては無理がある。こうして出来た高低差のギャップを北側に集め、より急な斜面を造っていた。也阿弥より流れる水を滝で落とし、その周辺に細かな苑路を設けて多様な視点場を確保している。水の流れが確かに在った事は現在の公園内に残るかつての滝の跡（図 13）などから窺うことができる。このような傾斜に埋め込むように造られた三階建ての建築（図 14）が北東隅にあり、西側の門は直接3階部分と同じレベルになっていた。その建築の3階西側は眼下に庭園と、さらにその向こうに一面に広がる京の町を一望できたと思われる。

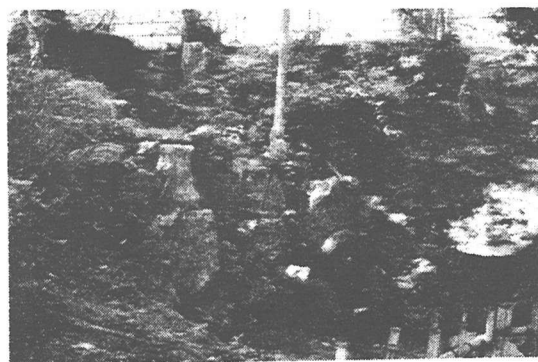


図 13 端之寮庭園跡

d) 也阿弥

也阿弥庭園の詳細がわかる絵図が残っている一方で、直接的に建築を描いた絵図がなく、庭園の絵図の隅に描かれた段差の上に一部建築が見られるのみである。この事は建築と庭園が明確な段差によって隔てられて

2 長楽寺の空間構成

1) 全景 — 段階的に並ぶ平場とその接続

山辺の上部で最も急斜面（約 30%）に位置する長楽寺は、花洛名勝図会（図 3）によれば六つの平場を階段状に結んで形成されており、足利義政の代に慈照寺庭園の試作として相阿弥が造った庭園を 2 段目から 4 段目の平地と階段で囲んでいる（図 4）。相阿弥庭園は、池を基調に作られており、水辺の豊かな起伏と植生が平場間の段差を解消している。



図 3 長楽寺境内（花洛名勝図会より）

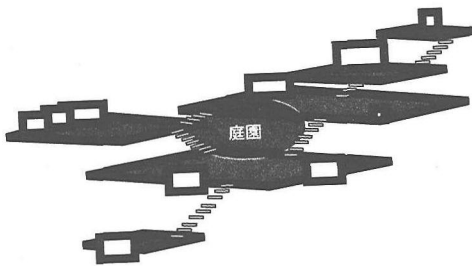


図 4 長楽寺の構成

2) 平場における建築

長楽寺境内の建築物は、こうして造られた平場の隅に配置されている。急傾斜に造られた平場の隅は、必然的に高低の変化に富む部分になっており、幾つかの建築は好んで崖から飛び出すように造られた掛造りになっている。また、花洛名勝図会には庭園の周辺に仮設的な建築物がみられる。さらにはより簡易な方法で床机だけをおいてその上を座敷にしている様子もみられる。これらの仮設的な装置は、美しい景観の中に日常の飲食という行為を持ち込み、自ら景観と一体になる工夫であると思われ、例えば図 5 のような細い柱と最低限の屋根で内とも外ともつかない建築である。

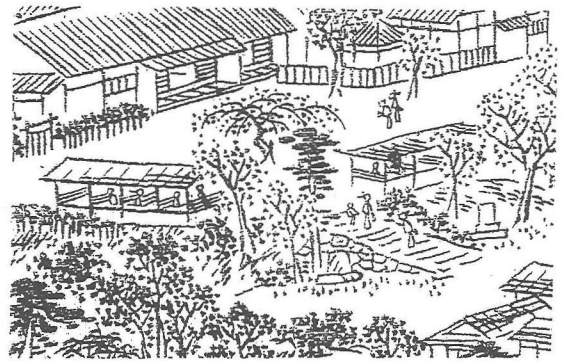


図 5 仮設的な建築（花洛名勝図会より）

3 安養寺の空間構成

安養寺では江戸初期までに六阿弥（りくあみ）と呼ばれた六つの塔頭が出現し、お互いに庭園美を競うように庭園林泉を作ったという²⁾。各塔頭の庭園などの空間づくりは、当時隠遁生活をこの地で送った文化人の手によるものであった。このように私的な性格の強い庭園であったが、数寄を追求した空間づくりは、非常な工夫を凝らしたものであった。六阿弥については各塔頭について都林泉名勝図会（寛政 11 年、1799）に詳しく掲載されており、都名所図会（安政 9 年、1780）や花洛名勝図会、残っている明治初期の境界図面³⁾、そして現在の円山公園の観察と合わせて検証することにより、当時の空間構成を概ね知ることができる。

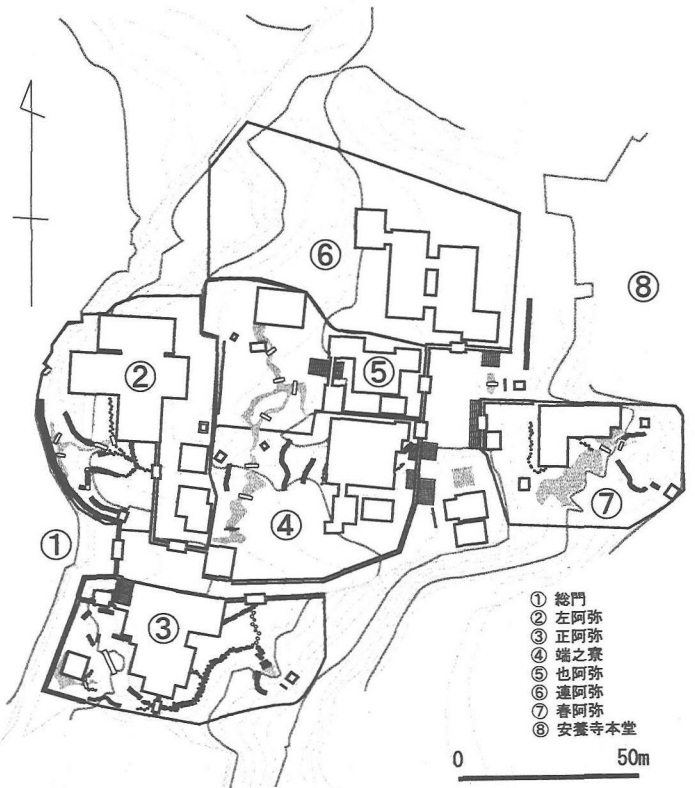


図 6 六阿弥平面図



図 14 端之寮の庭園と建築（都林泉名勝図会より）

いた事を意味していると考え、現在の地形は中央で敷地を東西に分ける石垣で2段階になっており、この事と併せて図 15 を作図した。周囲の地形と併せて考えても、地形に起伏は少なく、中央に配された水の流れを基調に作庭され、西側が崖になっている為、建築内から西を向くと、見事な庭園とその向こうの洛中を眺めることが出来た（図 16）。

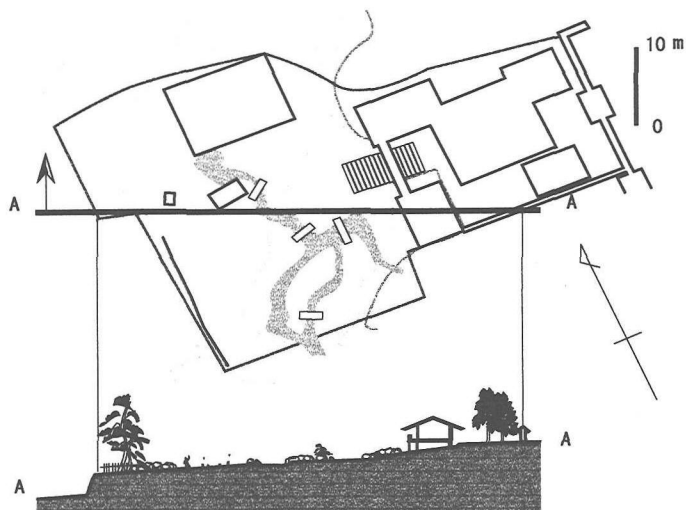


図 15 也阿弥平面・断面図



図 16 也阿弥庭園（都林泉名勝図会より）

e) 連阿弥

連阿弥は六阿弥の中でも特に広い敷地をもち、上部に建築群を配置し、西へ下る急斜面をそのままの地形を使って単純に芝を敷いた松林にしていた。他の庭園に必ず描かれている遣水が連阿弥の絵図には確認できない。

f) 春阿弥

春阿弥には相阿弥が造った十景を持つ庭園があったが、現在は全く残っていない。現在の周辺の地形と絵図（図 17）のみから推定できる塔頭内を作図したもの



図 17 春阿弥の庭園と建築（都林泉名勝図会より）

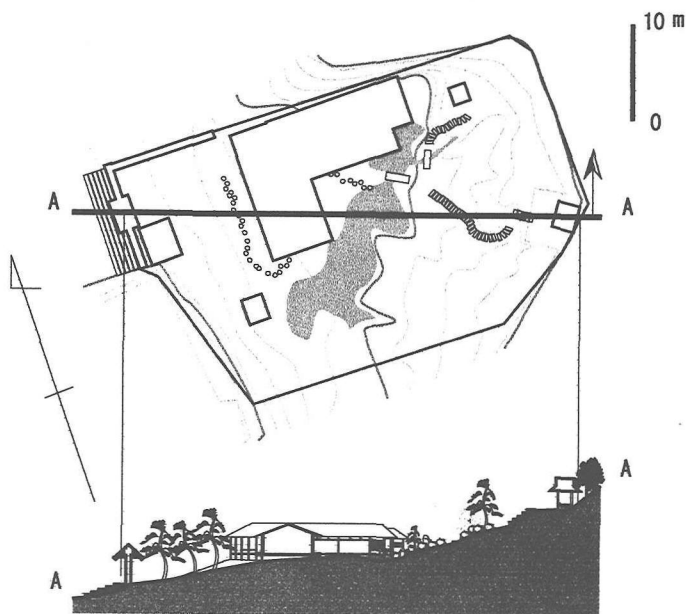


図 18 春阿弥平面・断面図

が図 18 である。建築東側の庭園は急斜面へさらに凹凸をつけ、見え隠れする苑路を配している。正阿弥と同様に、傾斜上部の高いポイントに視点場を設け、庭全体と建築、さらにはその背後の洛中への眺望を可能にしている。また、ここでは主要な建築が池にかぶさるように配置され、建築までを庭の一部に取り込む

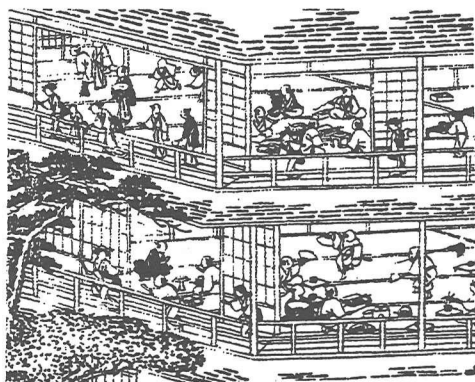


図 19 六阿弥塔頭の建築（都林泉名勝図会より）

工夫をしていた。

こうした構成を意味のあるものにする重要な要素として、主要な視点場となる建築の基本構造に、六阿弥全部に共通した工夫が見られる。六阿弥塔頭の多くの建築が図 19 のような様式であった。すなわち、内部と外部を隔てる壁は極力少なく、柱と柱の間隔もかなり広く取っている。外部の景観を見せる部分ではほぼ全てに共通して縁を設けており、人は縁に出て景観を愉しむ事が可能であると同時に、障子戸を開け放って外部と一体化した空間を愉しむ事も出来る。このような建築が塔頭敷地内の配置や土地の形状で、見せる主要な風景が決定されたと思われる。図 20 は地形と庭と建築の関係を図式化したものである。これによると、決定される主要な視線方向は、庭園を透かす方向になることが分かる。左阿弥型は下方へ、正阿弥型は上下方向へ向かう視線が主となるが、この 2 タイプを基本として、庭園と建築との距離により、近い順に端之寮

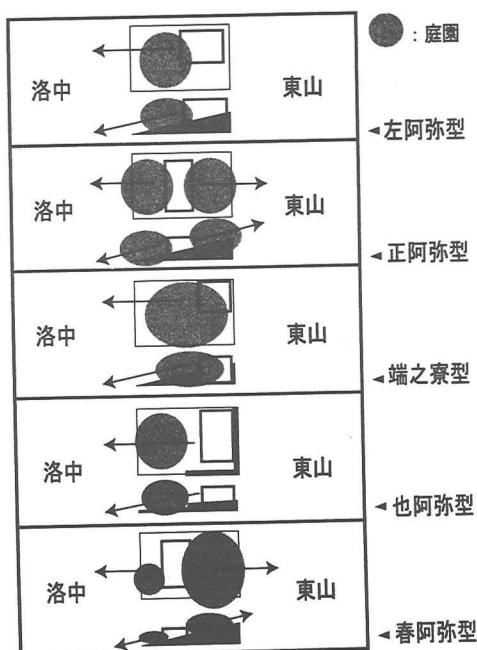


図 20 地形と庭園と建築の関係

型、春阿弥型、也阿弥型に分けられる。端之寮は建築を崖と盛土で囲み庭園と文字通り一体化している。また、その他の視線も多様に作られており、諸絵図に見られるような立体的で重層的な庭によって造られた多数の視点場により生み出された。

4 双林寺の空間構成

上記二つの寺院に対して、双林寺は山辺中部の比較的ゆるやかな斜面(約 7%)の真葛ヶ原の中に位置し、山辺上部のような空間構成とは少し異なっていたと思われる。

1) 全景 — 並列する塔頭群

現在の双林寺は本堂付近しか残っておらず、従来のほとんどの敷地が円山公園の音楽堂などに使われているが、近世の双林寺は安養寺と並ぶほど広い土地を占めていた。そのなかに数個の塔頭が並んでいたが、緩斜面であるため安養寺で見たような塔頭の間に大きな高低差はなく、ほぼ平面状に並んでいたと思われる(図 21)。ただし東山へ近づくほど傾斜が比較的大きくなっていたことから、東奥の塔頭ほど変化に富んだ庭園をつくる可能性を持っていた。



図 21 双林寺全景（花洛名勝図会より）

2) 各塔頭における庭園と建築の関係

双林寺の空間構成に関する資料は都林泉名勝図会に文阿弥と長喜庵が描かれており、これを考察することができる。文阿弥は図 22 のような構成になっていた。東山を借景にして庭の自然と重ね合わせている。長楽寺や安養寺のような西側の町への眺望は得られないが、緩斜面に築山を設けて起伏を豊かにし、また、

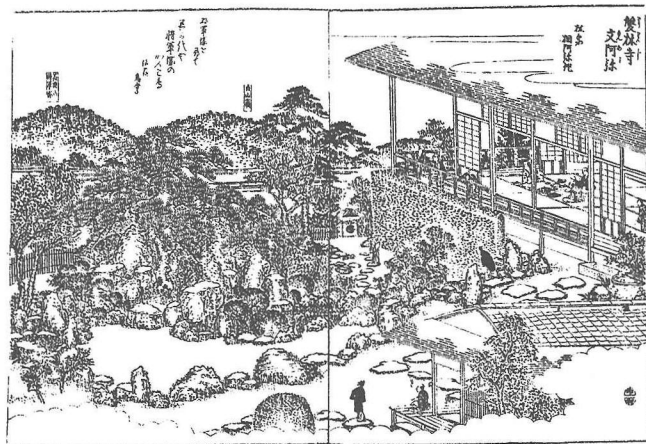


図22 双林寺文阿弥（都林泉名勝図会より）



図23 双林寺長喜庵（都林泉名勝図会より）

傾斜をつけた部分に建築を配置することで、掛造りのような方法で庭への眺望性を高めていた。文阿弥の東隣、長喜庵では次第に東へ傾斜のつく斜面を利用して、この傾斜にさらに築山を設けて視点場を造るなど、景観を豊かにする工夫が見られる（図23）。ここでも東山の稜線を積極的に借景として利用している。また、植生などの庭園の要素と建築の間を断絶せずに密につながる、主要な視点場となる建築内が庭園の一部であるかのような臨場感を楽しめるようになっている。建築の様式は安養寺で見たものと同様である。

いずれの塔頭においても、起伏を最大限に活かし、または造成することで庭園の重層性を出す工夫をして、建築を庭園と一体化させている。

5 空間構成を活かした行為

江戸中期、明和（1764-1772）の頃から、双林寺、安養寺において、生活が向上した町人層が「遊山見物」のために洛外へ出向くようになった事を背景に、それぞれの塔頭がその内部を積極的に開放し始めるように

なった。これらの塔頭は近世の多くの文献において、「料理茶屋」として登場する⁴⁾。つまり、参詣客に料理や酒などが出され、茶屋のような場をつくっていた。

また、ここでは席貸（せきがし）という、いわばレンタルスペースが行われ、席貸の場では文化的会合と宴席が主として行われた。文化的会合の例としては、茶会、菊会、立花・生花会、素謡会、書画展などが挙げられる。また、東山において、寛政4年（1792）より明治初年まで70年間毎年春秋2回東山で開かれた「東山新書画展観」という、洛中の町人と画家との交流を図る画期的な催しが行われたが、六阿弥の一つ、端の寮（庭阿弥）が清水寺と並んで会場となった⁵⁾。図24は正阿弥で行われた書会の様子である。この絵図において、書会の賑わう様子と庭園美の表現が同時に描かれている事は、これらの諸活動が一つの景観として魅力があったことを意味する。席貸では、宴席も多く行われた。ここで特徴的だった事は、宴席の場に「やまねこ」と呼ばれた芸妓が出入りした事である（図25）。この芸妓達は、近接する下河原という地から出稼ぎ専門で通っていた。芸妓の中でも格式が高く、起源は太閤の北政所の養成したものであるという⁶⁾。寺院境内において、格式高い芸妓を呼んで宴席を持つといった愉しみが流行となった。



図24 正阿弥の書会
（都林泉名勝図会より）



図25 やまねこ
（都林泉名勝図会より）

このように、江戸初期に設えられた特徴的な空間構成は、江戸中期より庶民に開かれ、利用されるようになった。優れた景観を備えた場が飲食、饗宴、催しの会場となることで、人々に臨場感のある景観体験として共有されることとなったといえる。

6 結語

以上より、近世円山界隈の時宗寺院でなされた位置

の特性に結びついた空間構成と、その上に新たな愉しみを追求した人々の行為が明らかにされた。すなわち、最上部にあって最も急傾斜である長楽寺では幾つかの平場を立体的に組み合わせて土地を造成し、平場の間の起伏が豊かな場所を使って庭園を造った。次に傾斜の大きい安養寺では、敷地内に大きな起伏を持ったままの塔頭が立体的に組み合わせられ、建築と庭の多様な位置関係が見る風景を決定した。そして山辺中部にあり緩傾斜の双林寺では斜面上に平面的に並んだ塔頭で構成され、塔頭敷地内では立体的な空間構成を造るために築山や借景が用いられた(図 26)。このようにそれぞれ豊かにつくられた寺院内の空間は、後に開放され席貸が行われ、飲食、宴席の他、展観などの文化的な交流の場として利用された。本来人の愉しみのためにされた空間構成が、新たな人の活動を産み出し、さらに発展するという構図が明らかになった。

これらの寺院は現在、その土地のほとんどが円山公園として利用されているが、円山公園の敷地はさらに山辺の下部まで至り、近世においては真葛ヶ原や祇園社の境内であった部分が多く含まれる。近世におけるこれらの空間構成も注目すべきものがあり、続けて研究を行うつもりである。

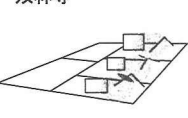
 長楽寺	●平場の量なり ・庭園が平場をつなぐ ・簡易な座敷の設置 ・平場間の起伏に富む部分に建築を配置
 安養寺	●塔頭の立体的な量なり ・庭園間の水のネットワーク ・建築と庭の一体化、建築の配置の工夫 ・多様な視点場と視線の多方向性
 双林寺	●塔頭の平面的並列 ・建築と庭園の一体化 ・大きな築山などで起伏を演出 ・山を借景(展望が乏しい)

図 26 長楽寺・安養寺・双林寺特性

謝辞

本研究には多くの方々のご協力を頂いた。京都大学大学院工学研究科中村良夫教授には貴重なご指導を賜り、千里国際情報事業団の土井勉様・京都市建設局の小林義樹様には貴重な資料・ご示唆を賜った。慈円山安養寺御住職、鷲尾山長楽寺御副住職、左阿弥御当主、東観荘御当主にはヒアリング調査において多大なるご協力を頂いた。ここに感謝の意を表す。

- ¹⁾ 丸山宏：京都円山公園成立前史、造園雑誌、48 (5)、1984/円山公園の拡張、造園雑誌、48 (5)、1998
- ²⁾ 田中緑紅：なつかしい京都、京を語る会、p12、1958.1
- ³⁾ 京都府：京都府庁文書、社寺土地一件、地理掛、1886
- ⁴⁾ 例えば、「羈旅漫録 (1717)」、「甲子夜話 (1830 頃)」など
- ⁵⁾ 京都市編：京都の歴史第六巻伝統の定着、pp.182-183、1979.9
- ⁶⁾ 田中緑紅：亡くなった京の廓上、京を語る会、pp.34-38、1958.6

近世の京都円山時宗寺院における空間構成に関する研究

出村嘉史・川崎雅史・田中尚人

本研究では、絵図や文献などの歴史的資料の分析やヒアリング調査、現地の観察をもとに、近世円山界隈に存在した時宗寺院の空間構成を明らかにした。急傾斜である長楽寺では幾つかの平場を立体的に組み合わせて構成され、平場間の起伏が豊かな場所に庭園を造った。次に傾斜の大きい安養寺では、敷地内に起伏を持つ塔頭が立体的に組み合わせられ、建築と庭の多様な位置関係が視線の多様性を産み出した。そして緩傾斜の双林寺では平面上に並んだ塔頭で構成され、立体的な空間構成を造る為に築山や借景が用いられた。このように豊かにつくられた空間では、後に席貸が行われ、飲食、宴席が積極的に行われ文化的交流の場として利用された。

Landscape formation appeared on Maruyama Jisyu temples, Kyoto in Edo era

By Yoshifumi DEMURA, Masashi KAWASAKI and Naoto TANAKA

Landscape formations of Maruyama temples firstly depended on inclinations of the lands. The most steep one, Chōraku-ji, was built up with several flat area connected each other, between which they created beautiful gardens. In An'yō-ji, also steep one, there were six separated sites which had ups and downs abundantly, in each site various relations between gardens and buildings made people turn their eyes toward various directions. Finally, Sōrin-ji had gentle slope, so they made artificial heaps in their gardens to make their landscapes complex, or they use Syakkei. Afterward, these temples were used as places of cultural communication.